

学研映画

人権啓発映画

●対象／小学校高学年



わたしだけが

文部省選定

●15分 16ミリ ¥130,000 195138

ビデオ ¥44,000 1496617

(学校価格¥22,000) ※表示価格は、消費税抜きの価格です。

企画の意図

学級の日常生活の中では、特定の子供が、他の多くの子供たちから不当な差別を受け、悲しい苦しい思いをするといったことがよく起こる。

この作品は、他校から転入してきて、いわれない差別を受ける小学6年の秋子をめぐる、学級の他の児童たちのさまざまな対応の姿を描きながら、直接、差別する者だけでなく、実は、まわりで差別が悪いと知りながら傍観者的な立場をとっている子供も、差別をささえ温存させているのだということを理解させ、みんなで差別を見逃さず、追求していくことの大切さを訴えようとするものである。

この作品の内容

- 6年生の新学期に、雪江のクラスに転入してきた秋子は、なぜか、他の仲間から嫌われていた。感じが暗い、つんとすましていて、変な家に住んでいる…みんなが、そんな噂をするのを聞いて、雪江も、出来るだけ秋子避けるようにしていたが、秋子の悲しそうな顔を見るにつけ、心の中でなぜ自分は、彼女を避けるのだらうと自問自答したりした。
- そんなある日、秋子のことが学級会の議題として取り上げられた。秋子が意地悪されているという者…秋子のほうが、自分たちを避けているという者…秋子が、一人勝手過ぎるのだという者…さまざまな意見が出て、室内が騒然とする中、先生の助言で秋子の意見も聞くべきだということとなり、秋子は指名されて一度は立ち上がったものの、なぜか急に座り込んで泣き出してしまった。



- 雪江はそんな秋子のことが気に入り、その日の帰りにも、「さいなら」と小声で呟いて去っていく秋子に、「さよーなら！」と大きな声を返したりしたのだが、友人の和子は、「あんた、あんまりあの子にかまつとると、みんなから変に思われるよ」と、忠告した。
- それから何日かがたつて、運動会の予行演習が行われた日の事。グラウンド中央での競技が終わって、雪江と秋子が親しく話し合いながら席に戻ってくると、

秋子の隣になった道子が、突然立ち上がって、秋子との間につま先で線を引き、「いい、ここからこつちへ入ったらいけんからね。のろまがうつるけ」という。その言葉にまわりにいた子供たちも同調して、どつと笑いが起こった。その時、雪江もつつられて笑ってしまったのだが、ふと気がつくとなりの秋子は、じつと遠方を見て顔をこわばらせていた。



- 友達になりかけていた秋子に、心ないことをしたと、雪江は学校の帰り道に、秋子をつかまえて、一生懸命あやまつた。しかし、秋子は、「もう、ええつたら」と、走り去ってしまう。なすすべもなく、家に戻ってきて、軽率な自分を責める雪江だったが、やがてこのことは、このままに済まさないで、秋子の家に行つて、きちんと謝るべきだと決心する。
- 川沿いの道を、秋子の家へ急ぐ雪江の顔には、「だめよ、あの子と仲良くしたら、あんたが除け者にされる!」、「のろまがうつる!」、「雪江ののろま!」といった声が浮かんでくる。そして、ふと決心が鈍りそうになる。しかし、気を取り直して走りはじめた雪江は、友人の和子に出会い、「今、謝らんかったら、ずっとこのままになってしまう。私だけが、友達になつても仕方がないという気持ちが悪いんよ…」と、必死に説得し、二人で秋子の家へ急ぐのだった。

企画

北九州市教育委員会

制作スタッフ

制作/星野國夫
プロデューサー/金子泰生
脚本・演出/小野 豪
撮影/西川浩史
照明/日野菊丸
制作進行/米野寿浩

音楽/原 正美
録音/読売スタジオ
現像/IMAGICA

配役

北沢雪江=栗須絵里子
大山秋子=山下まどか
大西道子=皆田尚映
石川和子=徳永舞子
村上明美=島田佳代子
渡辺直子=大久保千奈美

原 加代=尾針亜紀
伊藤久子=加納祐紀
高橋一夫=田中祐一
戸田正明=原口北斗
山口健太=筒井勇一郎
担任の教師=いとう美香
雪江の母=松井美保

お求めは……

24-06145 '95/4 ㊤

㊤'99/3

学研

情報メディア事業部

〒146-8502 東京都大田区仲池上1-17-15
TEL (03)3726-8558 FAX (03)3726-8626